

## 平成30年度 地域貢献研究助成費 実績報告書

平成 31 年 3 月 20 日

報告者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	名越 恵美
研究課題	在宅緩和ケアに関する訪問看護師の困難感と多職種連携に関する研究					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	名越 恵美	看護学科・准教授	成人看護学・がん看護学	研究統括・分析・まとめ	
	分担者	山形 真由美 吉田 雄太 津曲 真弥 後藤 瑞樹 藤田 千尋	看護学科・助手 保健福祉学研究科院生 保健福祉学研究科院生 保健福祉学研究科院生 倉敷市立倉敷市民病院	在宅看護学 看護学専攻 看護学専攻 看護学専攻 緩和ケア認定 看護師	アンケート作成・連絡調整 データ分析 データ入力 文献収集 緩和ケアスーパーバイズ	
研究実績の概要	<p>【背景と目的】超高齢社会となり、緩和ケアの対象は循環器疾患にも広がった。一方、平成29年10月に策定された第3次がん対策推進基本計画では、在宅緩和ケアの充実を掲げているものの、急変したがん患者や医療ニーズの高い要介護者の地域病院への受け入れ体制が不十分であると指摘している。岡山県政の重要施策において「地域包括ケアの推進」があるが、人生の最終段階で受けたい医療を地域住民が受けるために、切れ目のない医療の提供として、がん拠点病院や循環器の専門病院から在宅へ移行するにあたり、地域病院や診療所、薬局などの地域連携体制の整備は必要である。</p> <p>以上のことから、本研究では、在宅緩和ケアを受ける療養者に対して二次医療圏で実際に在宅緩和ケアを担う訪問看護師のケアの困難感と必要とする多職種の連携に関する認識やニーズについて明らかにすることを目的とする。本研究により、訪問看護師のニーズが明らかとなり施策の一つである「地域医療を支える医療従事者の育成」の基礎資料となると考える。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>【方法】対象者：県南東部保健医療圏（備前・和気）・県南西部保健医療圏（倉敷・総社・笠岡・井原）・高梁・阿新保健医療圏（高梁・新見）・津山・英田保健医療圏（津山・鏡野）・真庭保健医療圏（真庭・新庄）において在宅看取りを行っている訪問看護ステーションへ勤めている看護師 250 名</p> <p>除外基準：①小児科・精神疾患を中心としている訪問看護ステーションに勤めている看護師。②訪問看護ステーションや連携病院内に緩和ケア看護に関連する専門看護師・認定看護師が所属し、相談体制の確立された訪問看護ステーションに勤めている看護師。</p> <p>データ収集方法：自記式質問用紙によるアンケート調査。対象施設となる訪問看護ステーションの管理者へ研究協力を依頼し、実際に訪問を実施している看護師へアンケート用紙を配布していただく。対象看護師が記載後、アンケートは郵送法により回収する。</p> <p>調査内容：年齢・性別・看護師歴・職位・訪問看護歴・所属場所・病院での経験年数・院外での緩和ケアに関する学習会参加の有無・緩和ケアへの不安・管理体制・看取りに関する業務内容・活用したい認定看護師または専門看護師、「一般病院における看護師のがん患者ケアに関する困難感尺度」「高齢者の看取りに関する尺度」は 4 段階リッカートスケールを使用。</p> <p>分析方法：全体および各保健医療圏での各項目に関する記述統計、<math>\chi</math> 二乗検定、自由記載は質的に分析する。</p> <p>【結果】回収数 111 通（回収率 25%）、有効回答数 103 通（有効回答率 91.8%）であった。看護師の職位は、看護師（准看護師含む）65 名、管理者 25 名、主任 12 名であり、平均年齢は、49.3 歳、平均看護師年数 24.2 歳、在宅看護経験年数 8.1 年であった。性別は、98%が女性であった。担当エリア数は、平均 2.1（1-5）を担当していた。緩和ケア研修参加の有無は、有 66%、無 35%であった。また、地域連携の困難感に関しては、在宅療法移行に関するカンファレンス 4.0、患者の情報収集 3.6、多職種との情報共有 3.2 であり 3 以上あったことから、地域連携は自信を持って実施していると考えられる。一方、往診医とのコミュニケーション 2.6、信頼関係 2.6、医師との連携した看取り 2.7 とやや自信がなく、疼痛緩和の知識 2.8、症状緩和の知識 2.8、症状緩和のトレーニング 2.8 と症状緩和に関する方法や知識不足を感じていた。さらに、悪い知らせを伝えるコミュニケーション 3.1 と困難感を感じていた。さらに、事業所規模により連携に有意差がみられた。今後の地域貢献への示唆としてコミュニケーションを中心に苦手意識のある領域に対する教育介入が必要であり、現在行っている事業である ELNEC-J の開催を訪問看護ステーション看護師へ広げる必要性が示唆された。</p> <p>今後は、自由記述の分析をすすめていき、日本がん看護学会及び EAFONS で発表し、岡山県立大学紀要へ投稿予定である。</p>
<p>成果資料目録</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 名越恵美、津曲真弥、松本啓子：治療期のがん患者へのケアに関する地域病院看護師の困難感、第 49 回日本看護学会—ヘルスプロモーション—学術集会（201809）</li> <li>2. 佐藤 未季, 藤井 俊子, 湯村 智子, 名越 恵美：がん患者に対して緩和ケアに関する要望を聴取する際の看護師の困難感と対処、International Nursing Care Research (1347-1341) 17 巻 1 号 Page1-8 (2018. 04)</li> </ol>